

ソビエトの南下政策とシナの赤化

ところで共産革命を遂げたソビエトロシアが、外蒙に侵入し、外蒙をソ連属領の第一号にしました。外蒙は満

州のすぐ北ですから日本はソビエトの南下にも気を遣わなければならなくなりました。ロシア国家が共産国家になり、それが満州のすぐ北に存在するため、特別警戒しなければならなくなつたのです。しかしアメリカは距離も離れていたもので、ソビエトの東方侵略や赤化政策には無関心でした。

シナの状況はと言いますと、孫文が一九一一年に辛亥革命を起こし、清朝を倒して、中華民国が誕生します。

孫文の旗印は「滅満興漢」です。つまり、「満州を滅ぼして、漢民族を興隆」というのです。満州は中国ではないという意識です。万里の長城より外は「化外の地」であつて、自分の国とは考えていないのです。この満州を支配していたのが張作霖です。張作霖は人民から収奪し内政は行わない悪徳政治家で、中国本土への進出を企てたものですから、これを怒つた日本の将校は彼を爆殺しました。息子の張学良は、南の勢力と手を結び、満州の五色旗はやめて、晴天白日旗を満州に入れます。ところがこの南の勢力というのは、主に共産勢力なのです。そこに問題があるのです。満州が赤くなりだしたのです。ボルシェビキの勢力が入りまして、排日・侮日運動をもつてごくやりだしたのです。日本の満州における權益を奪ひ返そうというのです。

一方、張学良はアメリカと組んで満鉄包囲鉄道を敷きます。渤海湾に泰皇島という港を開発して、大連に対抗して、満州から得た農産物や鉱物を大連からではなくこの泰皇島から輸出させるのです。日清の約束を破つて、いわゆる満鉄包囲網を作るのです。満州事変がなぜ起こつたかを調査したリットン報告書にも、日清戦争からの長い因縁と長い歴史と交渉があつたことを述べたあと「世界にはこのような例はおそらくないだろう」とまで書いています。

昭和六年九月十八日の柳条溝事件、これは関東軍が鉄道を爆破させて事変を起こすわけですが、多くの知識人は「柳条溝事件は日本の謀略であり、明らかに侵略戦争だ。大東亜戦争は侵略戦争ではなかったかもしれないが、満州事変は明瞭に侵略でありその後の蘆溝橋事件も、青年将校が内閣の言うことを聞かずに、どんどん拡大してやつた侵略戦争だ。」と言います。しかし私は、そうではないことを歴史的事実をもって申し上げたい。

まず孫文は、ヨッフエというソ連の革命家と手を結びます。当時孫文は遠世凱に天下を取られ、浮いていました。その孫文に、ヨッフエ等のソ連の革命家が寄り添い、「第一次国共合作」を行うのです。つまり孫文率いる国民党の中に共産党を同居させたのです。国民党も結局、マルクス・レーニン主義を信奉することになるのです。

孫文の三民主義とマルクス・レーニン主義は違います。しかし共産主義勢力は、政策的な面から入り込みまして、国共合作を推し進めます。やがて共産主義勢力が伸び、孫文の勢力は圧迫されて、共産党系の政府ができます。これが武漢赤色政府の成立です。これは革命政府ですから、武漢赤色政府は、先ず一方的に漢口のイギリスの租界を實力で回収します。しかも共産党の勢力は、上手に国民党の中にもぐり込みまして、国民党のやり方を赤化させます。一九二五年に亡くなった孫文の後を継いだ蔣介石は、武漢赤色政府とは戦わないで、南京を攻略します。この時に起きたのが一九二七年三月の「南京事件」です。（日本でいうところの「南京事件」とは別。）